

## « *journalistique* » と呼ばれるフランス語条件法の解釈について

Des interprétations dans le cas du conditionnel dit  
« *journalistique* » en français

武井由紀  
Yuki TAKEI

### 0. はじめに

現代フランス語における条件法の用法をめぐっては、その形態の歴史的派生過程とその結果定着した形態的特性から、条件法としての形態自体が直説法に位置づけられる一つの時制であるのか、それとも一つの叙法、条件法として捉えるべきかという議論に始まり、「*l'imprafait*」と、「*le futur*」ないし「*l'ultériorité*」を記号内容 *signifié* に有する複合形態素 *-rais* に基づく形態論的、通時的研究に限らず、条件法が表し得る多様な意味効果や様相について、分類や特性の抽出を試みる意味論的、語用論的研究に加え、認識論的見地からの研究も確認できる。しかしながら、これまでの議論における主要な論点は、その用法自体が何を表しうるか、また話者が事象をどのように認識しているのかという点であり、条件法で示された言語情報が聞き手や第三者にどのように認識され、解釈されているのか、という点についてはあまり注視されていない。そこで本稿では、条件法の一用法、例えば« *journalistique* » と呼ばれる例についてフランス語母語話者を対象に調査を行い、その結果分析から、当該用法で表現される内容の認識が聞き手によって必ずしも一貫したものであること、また、当該用法と共に起る *marqueur de source* として着目される言語要素が、必ずしも条件法の使用を強制しないことを示す。

## 1. 先行研究と本稿の目的

条件法の用法の分類としてDendale (2001)を引用すれば、条件法はまず type temporel と type modal に大別される。前者には futur du passé の用法が、また、後者には次の三用法、① le conditionnel d'emprunt、② le conditionnel d'atténuation、③ le conditionnel d'éventualité が下位分類される。そのうえで Dendale は、「...il y en a deux qui sont plus fondamentaux que les autres et qu'on pourrait appeler *emplois canoniques de base* : l'emploi « éventualité » (ou conditionnel de la période hypothétique) et l'emploi « futur du passé »。」(Ibid., 9) と述べ、基本的には「éventualité」と「futur du passé」を規範的な用法とみなすとの考え方を表明している。それぞれの具体例を Dendale (Ibid., 13-14) から引用する。(1) は type temporel としての futur du passé、(2) は③ le conditionnel d'éventualité の用法例である。

(1) Les Argentins pensaient que les Anglais se **contenteraient** de faire un peu de bruit pour la forme (*Le Nouvel Observateur*, 1982)

(2) Si la Martinique était envahie, vous **feriez** la même chose (*Le Nouvel Observateur*, 1982)

しかしながら、「Deux autres emplois du conditionnel sont également candidats au statut d'emplois canoniques. Ce sont ceux du *conditionnel de la rumeur* et du *conditionnel de politesse*」(loc.cit)とも述べ、次の二例を挙げている。

(3) La police brestoise a demandé télégraphiquement à la Sûreté de Paris des renseignements détaillés sur Raynaud, qui **ferait** partie d'une bande et **aurait** des complices anarchistes (Brunot, 1922 : 532)

(4) J'**aimerais** vous dire combien je vous suis reconnaissant (Charaudeau 1992 : 473)

規範的用法とした (1)(2) とは異なる意味効果を表し得るこれら (3)(4) の用例について、どのような扱い方が考えられ得るのかという観点から、用例 (3) は「le type d'emploi (...) qu'on nomme par exemple *conditionnel de l'information d'emprunt* (Dendale 1991 : 210, Martin 1992 : 149) ou *conditionnel évidentiel* (Kronning, ce volume)」でもであると Dendale は続け、これらを補足的な規範的用法とする捉え方や、また (4) については「la sous-classe des conditionnel d'éventualité (les conditionnels hypothétiques *non-corrélatifs* chez Imbs 1968 : 77)」に位置づけて捉えることも一つの可能性として言及している。ここで、*conditionnel de la rumeur* に等しい用法を指すものとして、異なるアプローチから、既に様々な捉え方と名称が存在することが指摘できる。用語の多様性という点では、Vatrican (2010 : 83) も「Il existe aujourd'hui [...] une forme particulière de conditionnel appelée « conditionnel de rumeur » en français, ou encore, selon la terminologie utilisée, *conditionnel de citation* (Korzen & Nølke 1990), *conditionnel de l'allusion au discours de l'autre* (Ducrot 1984), *conditionnel d'altérité énonciative* (Haillet 2002) ou *conditionnel de non prise en charge* (Abouda 2001)」<sup>1</sup> と述べている。

このような条件法の用法について、Ducrot による Locuteur/Énonciateur という識別の視点に影響を受けて考察した Abouda (2001: 291) では、先述の用例 (3) と (4) を含めた 3 用法について「trois emplois du conditionnel, distingués habituellement dans la littérature grammaticale, les emplois « journalistique », « polémique » et « atténuatif »」と述べたうえで、「le trait qui leur est commun est qui en constitue en même temps, selon nous, le trait basique n'est autre que la non-prise en charge.」と述べ、「non-prise en charge」という意味効果の一つの共通要素に認める主張をしている。

また Kronning (2012: 83) は、marqueur épistémiqueとして次の言語要素 – auxiliaire épistémiqueの *devoir*, *apparemment* のような adverbep épistémique、そして le conditionnel épistémique (dit « journalistique ») を挙げたうえで、その一つ conditionnel épistémique (CE) の les propriétés et fonctions discursives について考察を深めている。Kronning は、自らの仮説「le CE est un *marqueur épistémique mixte* exprimant la *mediation par emprunt* et la *modalisation zero* (le refus de prendre

en charge le contenu cognitif de l'énoncé.」(Ibid., 84, 94)に基づいて議論を展開し、例えばCEについて「en ce qui concerne les *propriétés discursives*, la possibilité d'exprimer une attitude épistémique variable - dubitative ou non dubitative -, à l'extérieur du *domaine de médiation* qu'établit le CE, fournit, (...) un argument puissant contre l'hypothèse selon laquelle le CE serait un *marqueur modal* exprimant une attitude épistémique invariablement dubitative」(Ibid., 95)と述べ、少なくともCEを marqueur modal とする主張に異を唱えている。

このような条件法の用法について、これまでの多角的な研究を再考、再分析したDendale (2018: 63)の最近の研究では、当初より規範的用法と位置づけた« éventualité »と« futur du passé »以外の例、「exemples comme (1)-(3), où il n'exprime ni un futur du passé ni une éventualité」について－これらもまた、「Cet emploi connaît une trentaine de noms dans la littérature (v. Kronning 2004), parmi lesquels : *conditionnel journalistique, conditionnel de reprise, conditionnel épistémique.*」と述べられているが－、

- (1) Il y *aurait* eu une explosion au centre-ville.
- (2) Il y *aurait* des dizaines de victimes.
- (3) Une expédition *partirait* bientôt pour le pôle Sud.

これらの用法 *conditionnel épistémique* をCE1と呼び、そのうえで、これまでに提示されてきた主要な当該用法の捉え方について一つ一つ反証を挙げ、結果的に「La conclusion finale de cette analyse est que le CE1 est fondamentalement un *marqueur évidentiel (grammatical) de reprise à autrui*, une des trois classes d'évidentiels, et non un marqueur « mixte », comme le soutient depuis 2002 H. Kronning, ni un marqueur essentiellement de non-prise en charge (v. Abouda, Celle).」(Ibid., 74)と結論づけている。

以上、「éventualité」と« futur du passé »以外の用法にまつわる主だった議論と見解であるが、これまで議論されていることは、その用法自体が何を表しうるか、また話者が事象をどのように認識しているのかという点であ

り、条件法で示された言語情報が聞き手や第三者にどのように認識され、解釈されているのか、という点についてはあまり着目されておらず、実証例が見受けられない。また、Dendale自身、「le fait qu'actuellement aucun hypothèse n'explique de façon convaincante l'origine et la genèse de la signification de reprise à autrui du CE1, ni l'origine et la genèse du CE1 tout court (...), ne saurait être un argument pour ne pas faire de la reprise à autrui la signification fondamentale de l'emploi CE1 du conditionnel.」(2018 : 66-67)と述べているのだが、それを理由に「le CE1 est fondamentalement un *marqueur évidentiel (grammatical) de reprise à autrui*」との結論を主張するのであれば、この結論自体が必ずしも積極的かつ説得力のある議論によって導かれていないことを自ら述べていることにならないだろうか。主観的かつ直感的見解ではあるが、問題となる用法において、話者の事象の捉え方を定義付けられるとしても、その事象がどのように聞き手に解釈されるかについては、その事象にかかわる情報をどの程度把握しているか、その事象をどの程度重視しているか、あるいはその事象と聞き手がどのように関与しているか等、実に多岐にわたる要因から異なる解釈を生じさせるような個人差が少なくとも認められる可能性が高いのではないかと考える。

そこで、コンテキストの中で問題となる条件法の用法が聞き手にどのように認識、解釈されるかを探るため、フランス語母語話者に対して調査を行い、当該用法の解釈の実体を探ることにした。

## 2. 調査について

同じ内容を複数のフランス語母語話者に同じ環境で理解してもらうため、今回は記述言語を対象にした調査とし、テキストには次のノンフィクションを選んだ。これは文学作品を用いた場合に起こりうる、文体や表現効果として選択されうる条件法の影響をできるだけ避けるためである。なお、日本語の翻訳書が出ているため、併記する。以下、調査に用いたテキストの内容を理解するために載せた日本語文はこの訳本からの引用である。

Tahar Ben Jelloun, *L'étincelle. Révoltes dans les pays arabes*, le 6 juin 2011, Gallimard

タハール・ベン＝ジェルーン、『アラブの春は終わらない』、河出書房新社、2011年12月、齋藤可津子・訳（原題『火花—アラブ諸国の民衆蜂起』）

本書は2010年12月以降のチュニジア、エジプト、リビアで起こった政変を受け、ベン・ジェルーン氏自ら、「J'ai tenu à écrire ce livre bref pour expliquer ce qui se passe aujourd'hui dans le monde arabe, car, si personne ne pouvait prévoir ce printemps révolutionnaire, on en pouvait lire, ces dernières années, bien des signes avant-coureurs.」（仏：12）〔いまアラブ世界で起きていることを明らかにするため、私はこの短い本を書き記しておきたい。なぜなら、革命の春が青天の霹靂だったとしても、実はその前兆はここ数年来ははっきりとあらわれていたからだ。〕（日：8）と述べて執筆され、2011年6月に出版されたものである。同年8月には反体制派によるトリポリ制圧や10月のカダフィ大佐死亡等、結果的にカダフィ政権が崩壊したことは誰もが知るところである。従って、内容としては、「事実」に基づいて書き下ろされたテキストであり、その「事実」は少なくとも一定の年齢に達しており、一定の教育を受けてきた読み手にとっては共有されているものだと十分考えられる。

調査については、まず、問題となる条件法の用法で示された箇所を抜き出し、その意味効果を受け手に効果的に認識してもらうため、当該箇所に現れる条件法を直説法の現在あるいは過去に置き換えたものを第一段階として読んでもらい、非文あるいは違和感を覚える表現があれば抜き出し、自分ならばどのように表現するかについて記してもらった。もちろん、この加工テキストの中で直説法によって示されることで、事象が断定された内容として把握される、すなわち意味が異なることは承知の上である。これは、次に説明する調査の第二段階を経て振り返った際に、条件法で表現される妥当性を読み手自身に判断してもらうことで、その妥当性や必要性の有無を把握するためであった。続く第二段階としては、原文テキストを読んでもらい、加工テキストと読み比べ、条件法の使用について自由に意見を記述してもらった。

被験者はフランス語を母語とする留学生7名（男性2名、女性5名）で、年齢は20歳から27歳までの全員が20代である。なお、第一段階で加工テキストを提示した際、原文に対し何らかの変更が施されていることだけは伝えた。

ノンフィクションということもあり、条件法が使用されている箇所自体、全体として非常に少ない印象を受けた。条件法の意味が« éventualité » と « futur du passé » 以外を表す、問題となる用法の確かな例として抜き出すことができたのは、わずか2例であった。ただし、当該用例以外で用いられている条件法の文もダミーとして調査対象に含める方が良いと判断し、いくつか他の意味効果を表すと考えられる用例を含む、合計4例について調査を行った。なお、本調査では法助動詞と言われる *pouvoir*、*devoir*、*vouloir* を含む条件法による用法、ならびに疑問詞を伴う文の中や疑問文の中で現れる条件法の用法は調査の対象外とした。

### 3. 結果と分析

問題となる用法は、例えば *conditionnel journalistique* とする用語が示すように、*selon* や *d'après* などの語彙表現を伴うことが多い。このことについては、先述の① *le conditionnel d'emprunt* を指して、Gosselin (2001: 45-46) では « *le conditionnel journalistique* » との用語で表しながら挙げている、次の例でもはっきりと確認できるだけでなく、

- a. *Selon ce journaliste, le Président serait malade*
- b. *Selon ce journaliste, le Président partirait la semaine prochaine*
- c. *Selon ce journaliste, Le Président aurait été malade*

Kronning (2012) でも当該用法の例として、*Selon N, [ p ]* という *selon* を含む言語構造を抜き出して対象にしていることや、Dendale (2013) でも *marqueur de source* として *selon* がはっきりと性格付けられていることを踏まえれば、十分であろう。

調査のために問題となる用法として抽出できた例－用例1と用例2－におい

ても、同様の語彙表現と共に現れている。

<用例1>

Selon le quotidien britannique *The Guardian* (6 février 2011), des experts économiques (notamment Christopher Davidson, professeur de sciences politiques, spécialiste du Moyen-Orient à l'université de Durham) ont estimé la fortune de Hosni Moubarak à 70 milliards de dollars. Cette fortune serait placée dans des banques suisses et britanniques et serait constituée en outre de biens immobiliers à Londres, New York et Los Angeles. La fortune de ses deux fils s'élèverait à 8 et 17 milliards de dollars. Cela se passe de commentaire. (en fr., p.75)

イギリスの日報紙『ガーディアン』(2011年2月6日付)によると、経済の専門家(とくにグラス大学の社会政治学の教授で中東が専門のクリストファー・ダビッドソン)は、ホスニ・ムバラクの資産が70億ドルにのぼると推定した。これらの資産はスイスとイギリスの銀行にある預金と、ロンドン、ニューヨーク、ロサンゼルスに所有される不動産である。二人の息子の資産はそれぞれ80億ドル、170億ドルにのぼるといふ。

これに注釈は不要だろう。(en jp., p.82)

用例1では、下線部 serait placée、serait constituée、s'élèverait の3箇所を、それぞれ est placée、est constituée、s'élèvera に変換したものを加工テキストで用いた。selonによって始まる文章ではあるが、7名の内、加工テキストを読んで何らかの指摘をした者は1名(被験者no.4)だけだった。また被験者no.4は3つ目の s'élèvera を指摘するのみで、s'élèverait を適切な表現として原文テキストを読む前に書き残していた。以下、原文テキストを読んだ後のコメントとして主なものを示すが、コメントはそのまま転記した。また、コメントの記述に使用する言語は自由選択とした。

「serait placée : utilisation d'un des deux temps dépend de nos connaissances, serait constituée : vis-à-vis de la situation」(被験者no.4)

「違和感はなかったけど、こういう情報でよくはっきり言うなと思った。じっくり読んだら不自然に感じるかも。」(被験者no.1)

「serait placée, serait constituée : plus correct mais le futur n'est pas faux. s'élèverait : le conditionnel est plus correct que juste du passé car ils ont déjà acquis cette fortune」(被験者no.3)

「futur/conditionnel : les deux sont grammaticalement corrects mais donnent un sens différent au texte. Le futur sous-entends que cela va se passer, le conditionnel, que c'est une possibilité mais qui n'est pas sûre de se réaliser.」(被



験者 no.5)

「serait placée et le reste indique seulement que c'est une supposition et que l'on est pas sûr de l'information alors que l'emploi au présent montre que c'est une information dont on est sûr.」(被験者 no.6)

「le changement de temps ne m'a pas choqué ici car ce sont peut-être des faits avérés.」(被験者 no.7)

原文テキストでは、*marqueur de source* として *selon* がはっきりと明示されている。しかしながら、大抵の被験者にとって、条件法を用いなかった加工テキストを読んだ場合でも、文に違和感を覚えなかったことがこれらのコメントから読み取ることができる。また、下線部の寸前には「推定した」との表現があるにもかかわらず、例えば被験者 no.7 のコメントに注目すれば、この被験者がなぜ違和感を覚えなかったかについては、「... car ce sont peut-être des faits avérés.」と述べ、情報として示されている内容はおそらく確認された事実、つまり内容が事実として認識されうる、との見解を示していると捉えることができる。

次の用例2では、下線部 *se droguerait* を、それぞれ *se droguait* に変換したものを加工テキストで用いた。

## <用例2>

Kadhafi, comme Ben Ali et Moubarak, accorde beaucoup d'importance à son apparence physique. Il s'aime; son narcissisme est grotesque. Il aime s'habiller. Il change d'habits jusqu'à trois fois par jour. Il porte en permanence un gilet pare-balles. On dit même que son turban est blindé! Il s'est fait incruster des cheveux un par un sur la tête et les a teints en noir. La hantise de devenir chauve l'a toujours habité. D'après plusieurs témoins, dont son chef de protocole qui a réussi à s'enfuir, il se droguerait beaucoup. Cela se lit sur son visage bouffi, avec ces rides et ces plis grossiers. Il a un regard habité par le feu ou par une sorte de vapeur qui le rend absent. (en fr., p.108)

ベン・アリ、ムバラクと同様、カダフィーは自分の外見を重視する。カダフィーの自己愛、ナルシズムはグロテスクだ。彼は衣装に凝る。1日3回服を取り替えることもある。一日3回服を取り替えることもある。つねに防弾チョッキを身につけている。彼のターバンは防弾仕様 (!) とも言われている。髪の毛一本一本を植毛させ、それを黒く染めている。禿になるという強迫観念につねにさいなまれている。のちに逃亡することができたカダフィーの儀礼長を含む複数の証人によれば、相当な麻薬中毒者だという。彼のむくんだ顔、下品な皺やたるみを見ればうなずける。彼の目つきは火か湯気のようなものを帯びていて、上の空の印象を与える。(en jp., pp.119-120)

用例1同様、問題となる下線部はD'aprèsという語彙要素と共起した、またD'aprèsから始まる文である。しかしながら、この用例2については7名いる被験者の内、違和感を覚える文や非文として指摘するものは誰もいなかった。それどころか、直説法半過去を用いた« se droguait »の方がよく、原文テキストで用いられている条件法を使うことはできないのではないかとする意見が被験者no.3のコメントで記されていた。つまり、被験者no.3にとって、証言というものがほとんど事実だと認識されていることが分かる。また被験者no.5は、原文テキストと読み比べた後も、カダフィの側にいた人の証言という文脈から、自分なら« se droguait »のままにするとの意見を述べている。同時に被験者no.5は、「証人によると」との表現が100%確認された情報でないことをすでに含んでいるため、さらに条件法でそれを表す必要はない、ともコメントしている。この捉え方は、本稿で問題視している条件法の用法、例えば①le conditionnel d'empruntや« le conditionnel journalistique »と呼ばれるものが、先行研究ではselonやd'aprèsなどの語彙表現と共起するものとして扱われていた考え方に、少なからず疑問を投げかけることにはならないだろうか。以下が用例2に対するコメントである。

「条件法は、今でも薬をしているんじゃないかという印象。半過去は今はやめた。」(被験者no.1)

「se droguerait : il vaut mieux garder « se droguait ». C'est un témoignage, donc presque un fait, on n'en est pas sûr mais presque donc on ne peut pas utiliser le conditionnel.」(被験者no.3)

「se droguerait : avec le conditionnel, on veut signifier que c'est une information rapportée dont on ne peut garantir la vérité à 100%. Avec le passé, on veut dire qu'il avait l'habitude de le faire.」(被験者no.4)

「Il se droguait/se droguerait : j'aurai laissé « droguait » parce qu'il s'agit ici d'un témoignage d'une personne qui a cotoyé Kadhafi. Le « d'après des témoins » sous-entends déjà que l'information n'est pas 100% vérifiée, le conditionnel n'est pas nécessaire pour exprimer cela ici.」(被験者no.5)

「Si il s'est drogué pendant longtemps utiliser « se droguait » à la place « se droguerait » ne m'a pas choqué. Le sens n'est plus tout à fait le même mais la phrase reste correct.」(被験者no.7)

これら用例1・2以外にも、既に述べた理由から、ダミーとして調査対象に含めた別の意味効果を表す用例というのが、次の用例3と用例4である。

用例3は想定した可能性、つまり例えばDendaleが条件法の規範的用法の一つとして挙げた« éventualité »を表す用例であるが、下線部 permettrait、faudrait を、それぞれ permet と faut に変換したものを加工テキストで用いた。

### <用例3>

Dans les deux cas, les Européens se trompaient. La révolution iranienne a été possible parce que le chiisme est structuré selon une hiérarchie bien établie (imam, mollah, ayatollah, etc.). Pour les chiites, l'islam est politique ou n'est pas (c'est ce qu'avait déclaré Khomeiny à son arrivée à Téhéran). La révolution iranienne fut donc longuement préparée, en réaction entre autres à la répression barbare qu'exerçait la Savak, la police politique du chah. Révolution structurée, administrée, avec sa logistique et ses plans. L'islam sunnite, en revanche, ne conçoit pas la pratique de la religion en termes de hiérarchie. Il suit le Coran qui dit qu'il n'y a pas de prêtrise en islam. Ni prêtre, ni rabbin, ni ayatollah. Sur le plan politique, les pays arabes sont donc traversés par plusieurs courants, l'islamisme n'est que l'un d'entre eux. En Égypte, par exemple, seul un coup d'État militaire permettrait aux islamistes d'arriver au pouvoir. Mais il faudrait alors que toute l'armée soit islamiste, ce qui est absurde.

Pour ce qui est du second point, les Occidentaux ferment les yeux partout où ils vont faire des affaires, que ce soit en Chine, en Libye ou en Algérie. Mais depuis que Barack Obama a évoqué le respect des droits de l'homme devant son visiteur chinois en janvier 2011, il n'est plus aussi facile de faire passer les affaires avant les droits de l'homme. (en fr., pp. 33–34)

いずれの場合もヨーロッパの見方は違っていた。イラン革命が可能だったのは、シーア派が確固とした階級（イマーム、モラー、アヤトラーなど）によって組織されていたからだ。シーア派にとってイスラーム教とは政治でしかありえない（それは、テヘラン入りした際にホメイニ師が宣言している）。したがってイラン革命は、とりわけ国王配下の秘密警察サヴァクの残虐な粛清への反動として、長い時間をかけて準備された。体系的方法論と周到な計画のもとに、組織だって運営された革命だった。翻って、スンニ派イスラーム教徒の宗教実践に階級概念はない。彼らはただクルアーンを信奉し、そのクルアーンはイスラームに司祭職は存在しないとする。司祭もラビもアヤトラーもないのだ。政治的にはアラブ諸国には複数の政治的潮流がありイスラーム主義はその一つに過ぎない。たとえばエジプトでイスラーム主義者が政権を取るには軍事クーデターしかないだろう。だが、そのためには軍部全てがイスラーム主義者でなければならない。非現実的だ。

第二の点に関して、西側諸国は取引をしようとする国では、それがどこであっても目をつぶる。それは中国であれ、リビア、アルジェリアであれ同じだ。だがバラク・オバマが2011年1月、中国からの来訪者を前に人権尊重について言及してからは、人権を蔑に事業を優先させるのはこれまでほど簡単ではなくなった。(en jp., pp.33-35)

この用例3も、条件法から直説法に変換することで異なる意味を表すが、2箇所とも条件法がより適切だと指摘したのは2名（被験者 no.5, 7）、permettrait の1箇所を指摘したものが1名（被験者 no.3）で、3名の指摘に留まった。そ

れでも原文テキストと加工テキストを読み比べた後は、被験者 no.4 のコメントが示すように、条件法がより適切だと認識している。

「*« seul un coup d'état permet / permettrait »* : sens différent. Le présent veut dire que le coup d'État est *« en cours »*, les islamistes arrivent au pouvoir. Le conditionnel montre que le pouvoir n'est pas encore islamiste et que s'il devait le devenir un jour, ce ne serait que par la voie militaire. *« Il faut / faudrait »* : grammaticalement plus correcte au conditionnel avec la deuxième partie de la phrase.」(被験者 no.5)

「ici c'est un exemple du coup utiliser le présent est étrange car c'est une supposition.」(被験者 no.7)

「permettrait : il y a une idée de capaciter :s'ils faisaient ça ils seraient capable de faire. faudrait : c'est une condition, il faut que l'armée soit comme ça pour qu'ils puissent faire ça.」(被験者 no.3)

「条件法は、作者の考えが入っている。」(被験者 no.1)

「permettrait : style journalistique」(被験者 no.2)

「permettrait : le présent évoque une vérité absolue, alors que le conditionnel évoque une éventualité. faudrait :idem. Il est préférable d'utiliser ici le conditionnel.」(被験者 no.4)

「permettrait indique que ce n'est pas encore arrivé alors que permet on ne sait pas si c'est arrivé ou pas.」(被験者 no.6)

次に取り上げる用例4はこの文脈における意味としては、明らかに「*« éventualité »*」や「*« futur du passé »*」ではなく、勧めやアドバイスを表していると捉えうる用例であり、下線部 *feraient* を font に変換したものを加工テキストで用いた。ただし、下線部 *feraient* を直説法現在の font に変えた場合、事実として独裁者たちが詩人のことばを読んでいること、つまり明らかに原文テキストに比べて異なる内容を表すため、全員が指摘するだろうと推測された。しかし意に反し、条件法を適切なものとして指摘したのは2名(被験者 no.6, 7)で、条件法を提示しなかったものの違和感があることを指摘した1名(被験者 no.1)を加え、結果的に3名が指摘するに留まった。

<用例4>

C'est souvent durant les périodes de révolution et de résistance que les poètes sont visités par le souffle fort de la création. Après la Tunisie, qui est en train d'installer une nouvelle façon de vivre et de travailler, l'Égypte bouleverse toutes les données qui faisaient du monde arabe un bloc maudit, voué aux dictatures et à la régression. Certains écrivains ont passé leur vie à dénoncer cette malédiction. Les poètes sont toujours des visionnaires, ils pressentent ce qui doit absolument changer. Les dictateurs feraient bien de lire les poètes que, en général, ils méprisent. Car un jour finit toujours par arriver où la résistance populaire devient elle-même une sorte de poème — on l'a vu ces derniers mois dans les rues de Tunisie puis d'Égypte. (en fr., p.40)

詩人が創作の強いインスピレーションを受けるのは、しばしば革命やレジスタンスのさなかである。目下、新しい生き方や働き方を模索し整備しているチュニジアの一件以降、エジプトでは、アラブ世界を独裁者と後退に奉仕する呪われた圏域としていた様々な既成事実を揺さぶりがかけられている。生涯にわたってこの呪縛を糾弾した作家たちがいた。詩人たちはいつの世も予言者で、絶対に変化せざるをえないことを予感する。独裁者たちは、たいがい詩人を軽蔑しているが、詩人たちのことばをよく読んだほうがいい。なぜなら、いつの日か必ず民衆の抵抗運動そのものが一種の誌となるのだから。この数か月来、チュニジアとエジプトの街でみられたように。(en jp., p.40)

以下のコメントが示す通り、被験者no.7はこの文脈では直説法が用いられないことをはっきりと指摘している。また、被験者no.3～no.5のコメントからは、加工テキストを読んだ段階では気付かなかったものの、原文テキストと読み比べた後に、指摘した被験者同様、意味の違いをしっかりと認識していることが分かる。

「feraient bien indique une suggestion, ou même un devoir alors que le présent est une simple affirmation.」(被験者no.6)

「Ici c'est un conseil donné au dictateur par conséquent le présent n'est pas utilisable.」(被験者no.7)

「違和感がある。軽蔑するならどうして読むか。」(被験者no.1)

「feraient : ils devraient faire ça alors que « font » ils le font déjà.」(被験者no.3)

「feraient : quand on utilise le présent, on entend que les dictateurs lisent ces poèmes, alors qu'avec le conditionnel, on dit qu'il serait préférable qu'ils les lisent.」(被験者no.4)

「Les dictateurs font / feraient : sens opposé selon le temps. présent : ils le font déjà et font bien de le faire. conditionnel : ils ne le font pas mais ils devraient le faire.」(被験者no.5)

#### 4. 結論にかえて

調査結果から、全体的な考察としてまず挙げられることは、非文あるいは違和感を覚える箇所として指摘された内容については、被験者全員の指摘がすべてにおいて一致することはなかった、という点である。何ら指摘されなかったという意味では、用例2については全員が一致したと言えるものの、これは指摘内容についての見解の一致を表しているわけではない。もともと、調査の第一段階の過程でテキストのどこが変更されているかを知らない状態で被験者は加工テキストを読んだため、語彙や表現にかかわる部分についてのコメントもいくつかあった。

用例1と2では、テキストには、*marqueur de source*として*selon*や*d'après*がはっきりと明示されているにもかかわらず、加工テキストにおいて全員が非文や違和感を抱く文として指摘したわけではなかった。つまり、*marqueur de source*として*selon*や*d'après*が示されていようとも、その存在は条件法が後続することを必ずしも必要とせず、必要不可欠な要素とは断言できないことを表す、と考えられないだろうか。また、用例2について確認できた、直説法半過去の「*se droguait*」を用いる方が良いとするコメントや、従来の研究者の見解と部分的に矛盾することにはなるが、「『証人によると』との表現が100%確認された情報でないことをすでに含んでいるため、さらに条件法でそれを表す必要はない」、とのコメントは、条件法の意味効果に対する認識の異なりを表しているとも考えられる。このような結果を前にすると、Kronning (2012: 83)が次の例を挙げて<sup>2</sup>、

(5) /Selon Pierre,/ {Marie **serait**<sub>E</sub> malade}, mais, en fait, elle ne l'est pas (+ \*elle l'est).

(6) /Selon Pierre,/ {Marie **serait**<sub>E</sub> malade}, et, en effet, elle l'est (+ \*elle ne l'est pas).

「L'infirmité ou la confirmation du contenu transmis dans son domaine de

médiation montre, en plus, que le CE, comme d'ailleurs le discours rapporté (DR), a une orientation modale invariablement positive. Un énoncé au CE est orienté vers le « vrai », et non vers le « faux »」(Ibid., 87-88)と述べていることに、少なからず関連性があるようにも思われるが、少なくとも問題となっている用法の意味効果に対する認識の異なりとの関係を明らかにするには、別の研究が必要であろう。

用例1と2とは異なる意味効果、いわゆる« éventualité »を表す用例3についても、指摘が一致することはなかった。勧めやアドバイスを表すと捉えうる用例4でも、原文テキストと加工テキストでは明らかに違う意味を表すにもかかわらず、被験者らの判断は異なった。特に指摘をしなかった被験者らは、調査の第一段階の時点では、違う意味のまま読み取ったはずであるが、文脈上、非文や違和感を抱くレベルにまでは感じ取らなかったということだろう。これらのことは、言い換えれば、条件法の使用という選択には、文法的な誤りだと認識させるまでの強制力があるわけではない、ということにならないだろうか。

以上から、問題となっている条件法で示される用法については、受け手の解釈や認識が必ずしもすべて一致するわけではなく、個人差が認められること、また、*marqueur de source*として*selon*や*d'après*が示されていても、その存在が条件法の後続を必要不可欠なものにするとは断言できないこと、が導けるのではないかと考える。

## 注

- 1 イタリック体は本稿筆者によるもの。
- 2 原文では例文 (13)(14)。

## 【引用文献】

- ABOUDA Lotfi (2001), « Les emplois journalistique, polémique et atténuatif du conditionnel. Un traitement unitaire », dans Dendale, P. et Tasmowski, L. (éds), 2001, *Le conditionnel en français*, Recherches Linguistique, 25, Université de Metz, Klincksieck, pp. 277-294.
- DENDALE Patrick (2001), « Les problèmes linguistiques du conditionnel français » dans Dendale,

- P. et Tasmowski, L. (éds), 2001, *Le conditionnel en français*, Recherches Linguistique, 25, Université de Metz, Klincksieck, pp. 7–18.
- DENDALE Patrick (2013), « Conditionnel, corrélation, incertitude. Quelques réflexions », dans Norén, C., Jonasson, K., Nølke, H. et Svensson, M. (éds), 2013, *Modalité, évidentialité et autres friandises langagières. Mélanges offerts à Hans Kronning à l'occasion de ses soixante ans*. Peter Lang., pp. 61–79.
- DENDALE Patrick (2018), « Évidentialité ou non-prise en charge ? Le cas du conditionnel épistémique en français. Une réanalyse », dans *Langue Française*, no. 200, pp. 63–76.
- DUCROT Oswald (1984), *Le dire et le dit*, Éditions de Minuit.
- GOSSELIN Laurent (2001), « Relations temporelles et modales dans le “conditionnel journalistique” », dans Dendale, P. et Tasmowski, L. (éds), 2001, *Le conditionnel en français*, Recherches Linguistique, 25, Université de Metz, Klincksieck, pp. 45–66.
- KRONNING Hans (2012), « Le conditionnel épistémique : propriétés et fonctions discursives », dans *Langue Française*, no. 173, pp. 83–97,
- VATRICAN Axelle (2010), « La modalité et le “conditionnel derumeur” en français et en espagnol », dans *Modèles linguistiques*, no.62, pp. 83–94.